

6)トルコギキョウ、デルフィニウム、ラークスパー、アルストロメリアの品種と栽培法

中央農業試験場 園芸部 野菜花き第2科

1.試験のねらい

本道の立地条件を活かし、府県の端境期に向けて移出を拡大していくことができるトルコギキョウ、デルフィニウム、アルストロメリアの品種および栽培法を検討し、本道特産花きの生産安定と拡大に資する。

2.試験方法

それぞれの品目について、品種の特性調査および播種時期などの検討を行なった。

3.試験の成果

1)トルコギキョウ

3月播種、5月定植、無加温ハウス条件下で、のべ79品種について特性を調査した。F1系品種は固定種に比べ生育・形質が均一であり、初期生育も良好で開花までの日数も固定種より短い傾向であった。切花長については晩生系の品種で長かった。ロゼット、葉焼け、側枝の発生については品種間差がみられた。トルコギキョウの栽培指標を表1に示した。

2)デルフィニウム

3月播種、5月定植、無加温ハウス条件下で、ジャイアント・パシフィック系、ベラドンナ系の2タイプ計9品種について特性を調査した。収量性はベラドンナ系品種が高かった。定植1年目は7月下旬から8月上旬に1番花のピークがあり、2番花のピークは9月であった。

採花始めはベラドンナ系品種がやや早かった。デルフィニウムの栽培指標を表2に示した。

3)ラークスパー

3月播種、5月定植、無加温ハウス条件下で、6品種について特性を調査した。花色には赤、桃、紫、白、藤色があった。開花までの日数には品種間差が認められた。切花品質には差がなかった。ラークスパーの栽培指標を表3に示した。

4)アルストロメリア

4タイプ13品種について特性を調査した。加温条件下では順調に生育し、高品質の切花が生産できたが、無加温条件下では越冬率が低く、収量、品質ともに著しく劣った。

タイプにより採花パターンが異なり、切花品質にも差があった。表4に品種の特性を示した。

表1 トルコギキョウの栽培指標

作 型	3 上中下	4 上中下	5 上中下	6 上中下	7 上中下	8 上中下	9 上中下
無加温 パイプ ハウス	○		▲			■	

*育苗温度：夜温20℃以下
*土壌pH：6.0～6.5
*N施肥量：施肥窒素濃度300ppm
(1回当たり0.3kg/a、10回施用)

注)○：播種、▲：定植、■：採花期間

表2 デルフィニウムの栽培指標

作 型		3 上中下	4 上中下	5 上中下	6 上中下	7 上中下	8 上中下	9 上中下	10 上中下
無加温 パイプ ハウス	定植1年目	○		▲		■	■		
	2年目以降	<越年>			■	■			

注)○：播種、▲：定植、■：主採花期間

*育苗温度：15℃

*栽植密度：2条植え、条間30cm、株間30cm

*土壌pH：6.0～6.5

*N施肥量：基肥1.5kg/a、追肥(一番花後)1.5kg/a

表3 ラークスパーの栽培指標

作 型	播種期	3 上中下	4 上中下	5 上中下	6 上中下	7 上中下	*育苗温度：15℃
無加温 パイプ ハウス	3月播き	○		▲	■	■	*栽植密度：4条植え、条間15cm、株間10～15cm
	4月播き		○		▲	■	*土壌pH：6.0～6.5
							*N施肥量：1kg/a

注)○：播種、▲：定植、■：採花期間

表4 アルストロメリアの品種特性

タイプ	品種	採花期(月)												収量	切花長	花梗数	花梗長	茎径
		10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9					
オーキッド	パロマ	☆	□	□	□		□	☆	■	□	□	□		中	中	中	長	中
	オーキッド	□	□	□	□	□	□	☆	■	□	☆	■	☆	中	中	中	中	細
カルメン	レッドバリー	□	□	□	□	□	□	☆	■	☆	■	☆	☆	多	中	少	中	中
リグッ	リグツピンク							□	■	■				-	中	多	中	中
	リグツイエロー								■	☆				-	中	多	多	中
バタフライ	ピンクパンサー	□	□	□	□	□	■	□	■	□	■	☆	☆	少	短	少	中	中
	オリンピック						□	□	■	□	■	☆	□	少	中	中	中	細

注)■：10.1本/株以上、☆：5.1～10.0本/株、□：0.1～5.0本/株

※ロゼット：花茎が伸長してこない状態をいう。